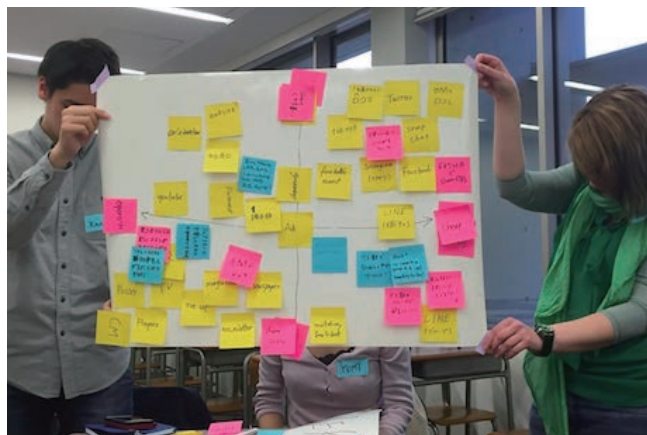

六本木アートナイト2019 × 慶應義塾大学アート・センター 「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト共同プログラム 「アートナイトを語る—My Night Cruising」

報告書



六本木アートナイト実行委員会



1. 本事業の概要

〈企画タイトル〉

六本木アートナイト2019×慶應義塾大学アート・センター
「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト
共同プログラム「アートナイトを語る—My Night Cruising」

〈開催期間〉

2019年4月～2019年7月（前期講座として実施）

〈企画概要〉

六本木アートナイト2019と慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトの共同企画として、慶應義塾大学の学生を対象にワークショップを実施した。六本木アートナイト2019をフィールドとして活用しながら、慶應義塾大学アート・センターの専門分野であるアーカイブを切り口に、四部構成のワークショップを展開。ワークショップは、六本木アートナイトをどのように語り、残していくかという芸術祭特有のアーカイブの諸問題に焦点をあてながら、理論編・取材編・発信編・アーカイブ編の4つの構成とし、身近な地域で展開している芸術文化活動を体験する場と、その価値を共有するための効果的な発信方法を学ぶ機会の提供を行った。

〈事業の背景〉

六本木アートナイトは、官民一体の事業として幅広い関わりとともに成長してきたが、特に「産学官」の「学」との連携を一層強化すべく、地域の教育・研究機関である慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトと共同企画を図った。六本木アートナイトを通じて、港区六本木エリアが将来にわたり、芸術文化の街となる基盤の確立を目指す中で、アートを利用したエリアブランディングの効果的な発信方法を模索するため、慶應義塾大学アート・センターの専門分野である「アーカイブ」を切り口とするワークショップにフィールド提供を行うこととした。また、区内在学の学生とともに、現代美術を取り巻く現状や地域で展開されるアートの役割を検討することで、長期的な観点からアートをういた活動的で豊かな地域社会を実現していく可能性を模索するねらいがあった。

〈目的〉

- ・ 六本木アートナイトへの学生参加の増加。
- ・ 地域文化資源体験×情報発信ワークショップの実践。
- ・ 若い世代に向けた現代アートを深く知る場の提供。
- ・ 長期的な視点で、六本木エリアにある美術館等の施設へ区内大学生が足を運ぶことを促す契機の創出。

〈主な会場〉

- ・ 慶應義塾大学施設
- ・ 六本木区民協働スペース1・2
- ・ 森美術館（会議室）
- ・ 六本木アートナイト2019メインイベントでの各会場

〈対象〉

慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブプロジェクト2018」の受講生のうち、希望者（※ただし理論編の一部である公開トークセッション「夜のアーカイブ、芸術のドライブ」は、一般参加自由とした。）

〈参加人数〉

ワークショップ参加者：14名（うち留学生9名〔日・英で講座を実施〕）

公開トークセッション「夜のアーカイブ、芸術のドライブ」：27名

2. 「アートナイトを語る—My Night Cruising」実施内容詳細

【構成】

第一部：理論編、第二部：取材編、第三部：発信編、第四部：アーカイブ編の四つのテーマで構成。六本木アートナイト2019をフィールドとして、六本木アートナイトのもつ価値や魅力、およびそれらを効果的に発信する方法等を実践的に考察しながら、最終的には参加学生自身がそれぞれの興味関心に合わせ、ブログを執筆していった。



オリエンテーション

4月5日(金)17:00~18:00

開催場所：慶應義塾大学三田キャンパス講義室

参加学生に向けて、ワークショップのイントロダクションとして趣旨を説明する会を実施。六本木アートナイトのこれまでの歴史や、コンセプト、そして今年度のテーマなど、六本木アートナイトの基本情報を共有した。ワークショップの参加学生は、全14名で、自己紹介と共に、各々の専門や興味、ワークショップへの参加動機について発表した。現代アートを専門的としない学生が多く、経済学部や商学部など、所属や専門分野が様々であった。また参加の動機としてアートや街づくりに関心が大半を占め、その中でも美学美術史専攻の学生は通常の他の授業では理論研究を中心としていることから、このような実践的なワークショップへの参加に関心を寄せていることがわかった。

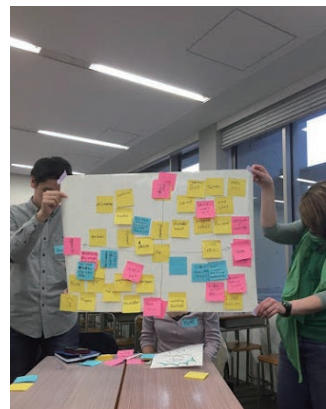
第一部＜理論編＞システム×デザイン思考のワークショップ

4月15日(月)16:15~18:00

講師：鳥谷真佐子 | 慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究科

開催場所：慶應義塾大学三田キャンパス講義室

六本木アートナイトを題材に、問題解決と価値の創造に向けたプロセスをグループで議論し、意見を共有しながら、思考を深めていくワークショップを実施。「六本木アートナイトへの学生参加をより促すには？」という課題設定のもと、六本木アートナイトの実行委員や事務局など、実際に六本木アートナイトを運営しているメンバーと学生が混ざって数チームに分かれ、グループワークをしながら、課題に取り組んだ。



第一部<理論編>トークセッション:「夜のアーカイブ、芸術のドライブ」

5月12日(日)14:00~15:30

登壇者: 田村友一郎(森美術館「六本木クロッシング2019展:つないでみる」出展アーティスト)

久保仁志(慶應義塾大学アート・センター所員)

開催場所: 六本木区民協働スペース1・2

慶應義塾大学アート・センターの研究分野である「アート・アーカイブ」をテーマにしたトークセッションを実施。アーカイブに関する基礎的なイントロダクションと、鑑賞者の視点からの田村氏の作品に関して所員の久保仁志氏から話をし、その後、丁寧な場所や歴史のリサーチを経て作品制作を行い鑑賞者に提示していく手法を用いるアーティストの田村友一郎氏が、アーティストの視点から制作プロセスを語った。参加学生のみならず、一般の方にも門戸を開いたこのトークセッションでは、アート作品の制作プロセスとアート・アーカイブの関連性について広く語っていき、従来の「絵画とその鑑賞体験」などとは異なる「記憶には残るが記録に残しにくいアート作品とその鑑賞体験」に関するアーカイブ手法の模索のきっかけにもつながるようなトークセッションとなった。また、議論の共有化のため、トークセッションの記録映像をオンラインで公開した。
記録映像: <https://vimeo.com/343179179>



第二部<取材編>事務局長レクチャー・インタビュー

5月15日(水)16:45~18:30

インタビュイー: 六本木アートナイト実行委員会事務局長 三戸和仁

開催場所: 森美術館(会議室)

六本木アートナイト事務局長三戸によるレクチャーを実施。事前に参加学生から、六本木アートナイトに関する質問を集め、その質問にも回答する形で文化事業を担う組織と運営、今後の展望と課題等を説明していった。街全体のブランディングにつながる都市型アートイベントが持つ課題を共有しながら、作り手としての魅力も伝え、文化事業に携わる仕事の概観を共有した。



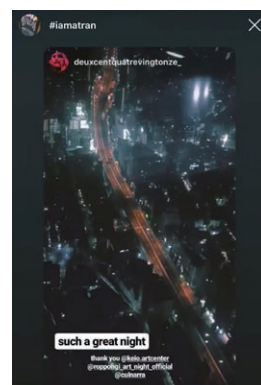
第二部<取材編>六本木アートナイト2019

5月25日(土)、26日(日)のメインイベント時、任意の時間帯に参加

参加学生は、事前にリサーチ・取材したことを元に、鑑賞プランをそれぞれが組み立て、自身の友人や知人を案内(=My Night Cruising)しながら、六本木アートナイト2019を巡っていった。



参加学生各自でSNSに投稿し、記録と発信を行った。



第三部＜発信編＞成果物の提出、執筆、編集

5月下旬～6月上旬

参加学生は、理論編と取材編の各イベント終了時に、記録として振り返りノートを書き、慶應義塾大学アート・センターのチューターからフィードバックを受けた。その後、各自のテーマに沿って、ブログを執筆。本ワークショップの成果として「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトのブログで公開した。

Medium: <https://medium.com/my-night-cruising-2019>

第四部＜アーカイブ編＞まとめ／総括としてのアーカイブ

ディスカッション:「アートナイトを語り続けるためのアーカイブ」

6月26日(水)16:30～18:00

開催場所: 慶應義塾大学三田キャンパス講義室

「六本木アートナイトを語り続けるためのアーカイブ」をテーマに、これまでの活動をアーカイブという視点で振り返った。実際の体験者が執筆するブログを参照することで、未体験の人に向け、体験を共有していくことの意義を考える機会となった。一夜限りのアートの饗宴である六本木アートナイトを一過性のものにしないために、参加学生からは、様々な意見がでた。例えば、各自のSNSで広めていくことや、学生自身が制作している冊子にブログ記事を掲載することなどが挙げられ、今後具体的にどのようなアクションができるのかを話し合った。また、事後的に活用する方法として、クリエイティブコモンズなど、著作権の扱いに言及しながら、ブログの展開などの情報発信の方法について議論していった。

3. 学生からのフィードバック

〈参加の動機〉

- ・ 作品を実際に見たり、インタビューをすることによって考えを深めた上で記事を書くことに興味があった。
- ・ 「アーカイヴ」について学び、考える機会だったため。
- ・ アートイベントで働く人の舞台裏を見る機会を得たかった。
- ・ 六本木アートナイトがどういうものか知りたかった。

〈プログラムに参加して〉

◎アートとの関係が変化

- ・ 六本木アートナイトに参加したことで、現代アートがなんなのか分かった気がした。
- ・ 街づくりやアートに関わる仕事を楽しそうだと思うようになった。
- ・ 舞台裏を見ることで、イベントや作品の良さが、いつもと異なるかたちで感じられた。
- ・ アートイベントや美術館の情報をもっと知るようにしたいと思った。

◎コミュニティの拡大

- ・ アートに興味がある人と出会い、色々な話ができて充実した時間だった。
- ・ ワークショップで多くの人の話を聞くことで、自分の心地よいと感じる分野が広がったと感じた。

◎自分の意見を人に伝えるスキルがついた

- ・ ブログを書く時にどのような観点に気をつけると読んでもらえるか、深く考える機会になった。
- ・ フィードバックを得ながら文章を書く機会を得たことで、慎重に考えながら文章を書くスキルが上がった。
- ・ なにかを「伝える」ためには、自分の体験に根ざした文章が必要だと感じた。
- ・ 著作権の重要性を実感した。
- ・ 多様な観点から考えを深め、想像力を高めていくことの重要性を感じた。

4. 慶應義塾大学アート・センターからのフィードバック

〈プロジェクトとしての狙い〉

◎地域のプロジェクトとの連携

「都市のカルチュラル・ナラティブ」は、地域の文化資源を巡る活動や、それを担う人々、組織を繋いでゆくことも一つの目的としているため、港区で長く活動している六本木アートナイトと連携を希望した。

◎現代アート領域とのコラボレーション

2016年から講演会や見学会を開催しているが、三田地区を起点としていることもあり、内容がやや伝統文化や歴史に偏りがちであった。地域と関わりながら展開する六本木アートナイトと共同することによって、美術館やギャラリーとの連携とはまた違った現代アート領域とのコラボレーションが可能になると考えた。

◎人材育成プログラムの拡大

2018年に、慶應義塾大学の学生を主な対象者とした、国際的な文化発信を担う人材を育成するワークショップ「Cultural Communicator Workshop」を開催した。2018年度は、アーカイヴでの調査を主軸に据えたが、2019年度はよりフィールドワーク的な要素を取り入れたいと考えた。

◎総合大学の学生を芸術実践と接続する

慶應義塾大学には、美学美術史専攻で美術を学ぶ学生はいるが、いわゆる制作系の講義はなく、芸術系大学との交流もない。ワークショップを開催するにあたって、総合大学の学生が、いきいきとした芸術実践に触れる機会を作りたいと考えた。

◎アート・フェスティバルのアーカイヴ構築に関する検討

慶應義塾大学アート・センターでは、現代芸術アーカイヴについて、理論研究と実践を行っている。六本木アートナイトは、非常に特徴的な都市型のアート・フェスティバルであり、六本木アートナイトをモデルに、アート・フェスティバルのアーカイヴ構築に関する検討を進めたいと考えた。

〈慶應義塾大学アート・センター側から見た六本木アートナイトとの連携の意義〉

市川佳世子 | 慶應義塾大学アート・センター所員

◎学内外での人的交流の拡大

六本木アートナイトの魅力に惹かれて、しかもバックステージも垣間見られるとあって、多様なバックグラウンドの学生が集まることとなった。学生・留学生同士の間で新しい交流が生まれただけでなく、教員にとっても交流範囲が広がった。特に、講座の第1部では、六本木アートナイトの魅力を伝えるクリエイティブな方法を模索する、という課題がシステム・デザイン・マネジメント研究科の鳥谷氏のプロジェクト課題と重なって、共同ワークショップが実現した。そして六本木アートナイトの実行委員会および事務局のメンバー等が学生とのディスカッションに積極的に参加してくれたという点で、学生、教員、社会人がフラットに話し合う機会が生まれたことが連携の大きな意義だったと感じている。

様々なコミュニティをつなぐ文化ハブとしてのミュージアム、というのは、まさに昨年京都で開催された国際博物館会議(ICOM)の大会のテーマで、今回の連携の成果を大学ミュージアムの部会で報告することができた。

◎慶應大学アート・センターが専門とする「現代アートとアーカイヴ」の関心を深めること

今回の連携で実現した第2部のトークセッションでは、この二つの領域の重なり合いを、一般の方にも知っていただく機会となった。六本木アートナイトをきっかけに現代アートをもっと良く知ろう、アートにあまり関心のない友達を誘って出かけよう、と思った学生もいて、海外の現代アートのイベントに慣れ親しんでいる留学生にとっても再発見があったようだった。

◎大学の通常の授業とは異なる実験的な教育実践

第1部の「システム×デザイン思考」のワークショップは、そもそもイノベティブな解決策を模索するための手法で、多様なバックグラウンドの人々がフラットに話し合うことに価値を見出している。今回のような「学生と教員と社会人がフラットに話し合う」という授業のあり方は、従来の講義を中心とする授業ではなかなか実現できない。そしてキャンパスから地域へ飛び出して、しかも六本木でアートを楽しみながら夜明かしすることを積極的に勧められる機会もなかなかないだろう。学生が主体的にディスカッションに参加し、実体験から知識や思考を深めるアクティブ・ラーニングの実践、複数言語による進行も価値ある実践となったと感じている。

◎大学の枠組みの中で人材育成インターンシップの機会提供

カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップは、大学が提供する、しかも文化と国際コミュニケーションを組み合わせたインターンシップであることがそもそも珍しく、多くの学生の関心を捉えている。今回は六本木アートナイトをフィールドとして、文化イベントのプロフェッショナルから直接話を伺い、フィードバックをもらい、自分の文章をブログ記事として発信する、という、大学の授業の枠を超えて、社会に一步踏み出す体験となった。複数言語でコミュニケーションを図ることも含め、様々な困難を克服することが学生の自信につながったようだ。実社会に出たときに必要となるスキルは何か、大学はどのような人材を社会に送り出せるのか、という観点から、教育のあり方を見直すきっかけにもなった。

◎学生コンテンツの社会発信

六本木アートナイトの実行委員会や事務局メンバーが学生による新たな発信のあり方の可能性を感じ、取り組んでくれたことで、多様なブログ記事コンテンツが仕上がった。中には小説のような創作ライティングもある。世に出せる文章に仕上げるということで、学生とチューターの間で何度もやりとりを重ねたこと、そして六本木アートナイトのスタッフにも丁寧に目を通していただき、的確なフィードバックをいただいたので、学生もチューターも自信をもって発信することができた。学生にとっては、社会に発信するためには時間をかけた編集過程が必要なのだな、と身を以て学ぶ機会になったようだ。

〈今後に向けて〉

◎ファシリテーターの育成

ワークショップ・プログラムを多言語で進行し、フィールドを提供していただく組織等との調整を行いながら、学生のコンテンツ制作を助けるファシリテーターとなる人材は、大学でも多く存在するわけではない。大学院生やポスドク等のアカデミック人材を、ファシリテーターとして育成するためのプログラムもまた必要である。

◎学生が作成したコンテンツの社会における位置づけ

ワークショップの中で学生が作成したブログテキスト等のコンテンツは、主催者が書いたものでも、プロの

ライターが書いたものでも、また一般来場者の書いたものでもない、独特の立場から作られたコンテンツである。このような学生が生み出したコンテンツが、社会にとってどのような価値を持つのか、学生とのグループワークなどを通じて改めて検討したい。

◎コンテンツの活用・拡散

本ワークショップの成果は、ブログやSNSで公開されているが、十分に知られているとは言えない。今後、プロジェクトのイベントなどを通じて、コンテンツの活用を進めていく必要がある。

◎ワークショッププログラムの内容・密度

今回、学生からは、もっとワークショップの回数が多くてもよいのではないかという意見が寄せられた。実際、六本木アートナイトという10年を越えて続く規模の大きいイベントを捉えるには、数回のワークショップでは時間が足りないことは確かである。ご協力いただくスタッフのみなさんの負担を抑えながら、どのように充実したワークショッププログラムを組めるのか、継続して検討したい。

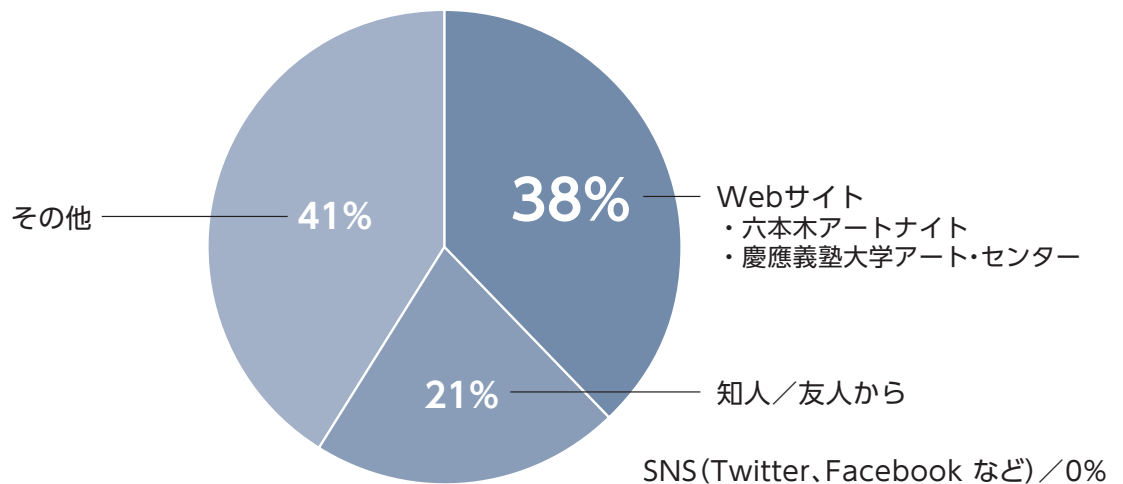
◎アーカイヴ

ワークショップ・プログラムをアーカイヴ化し、可能な資料は再利用したり、より広く公開することによって社会と成果を共有したい。本年度のプログラムでは、田村友一郎氏を招いたトークセッションの記録映像をオンライン公開している。グループワークで使用する教材なども、編集の仕方によっては共有化が可能ではないかと考えている。

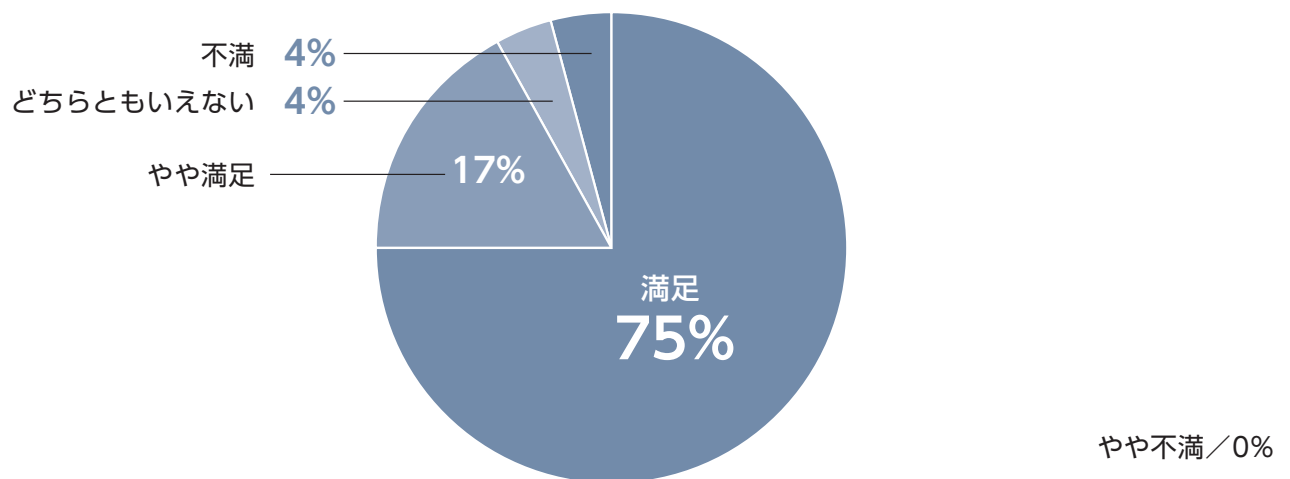
〈来場者アンケート〉 2019年5月12日(日)実施
六本木アートナイト2019×慶應義塾大学アート・センター
トークセッション:「夜のアーカイブ、芸術祭のドライブ」
来場者数:27人 回答者数:24人 回収率:88.9%

1. 本日のイベントについてお伺いします。

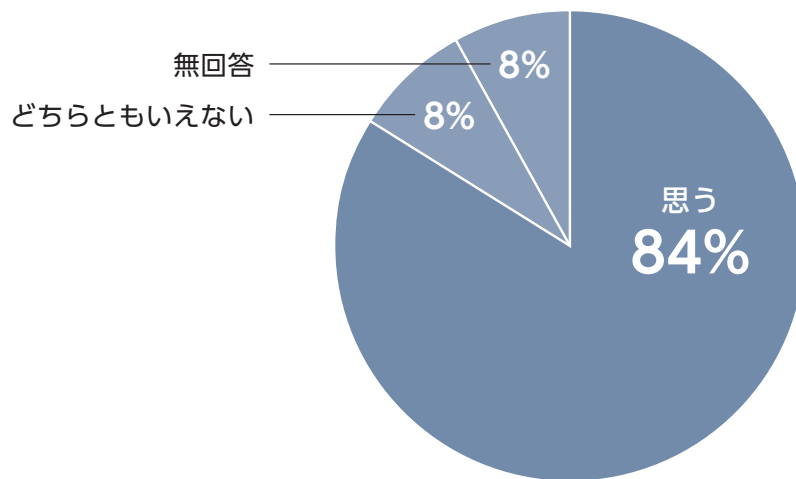
① 本イベントはどこでお知りになりましたか？（複数回答可）



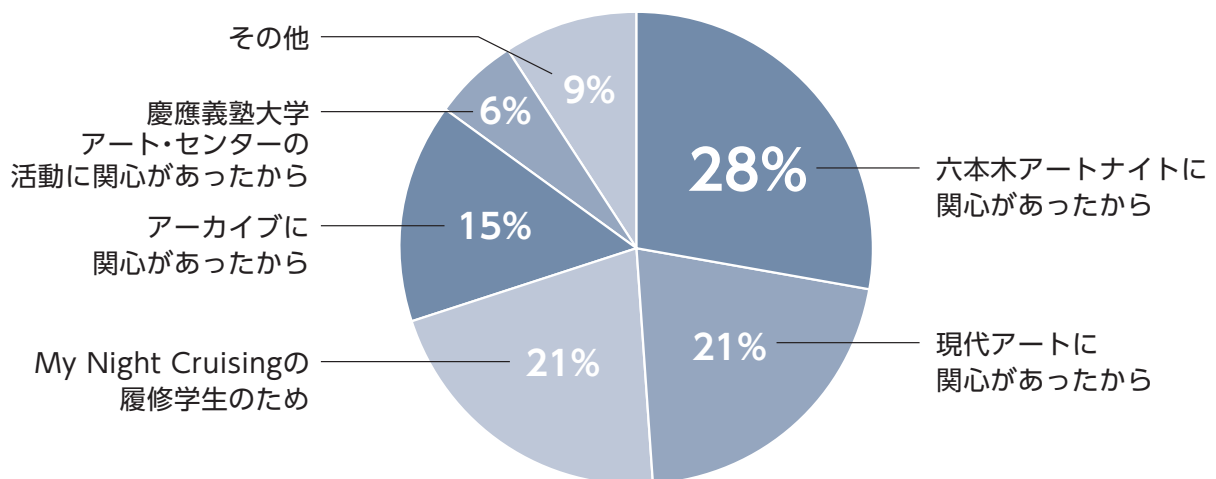
② 本日のイベントのご感想をお聞かせください。



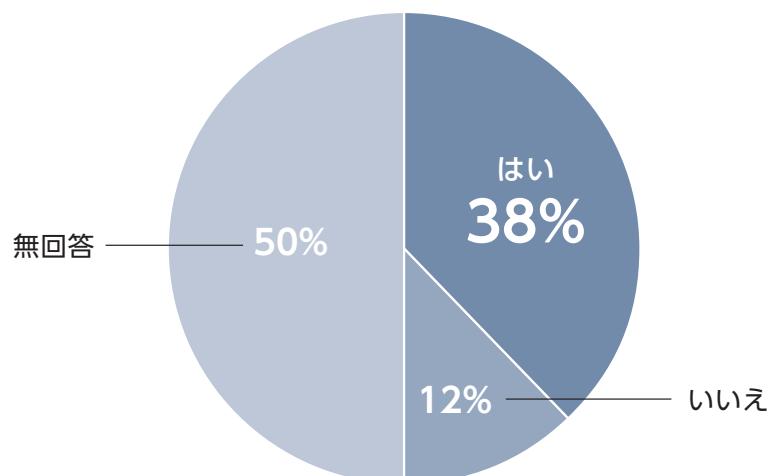
③ また参加したいと思いますか？



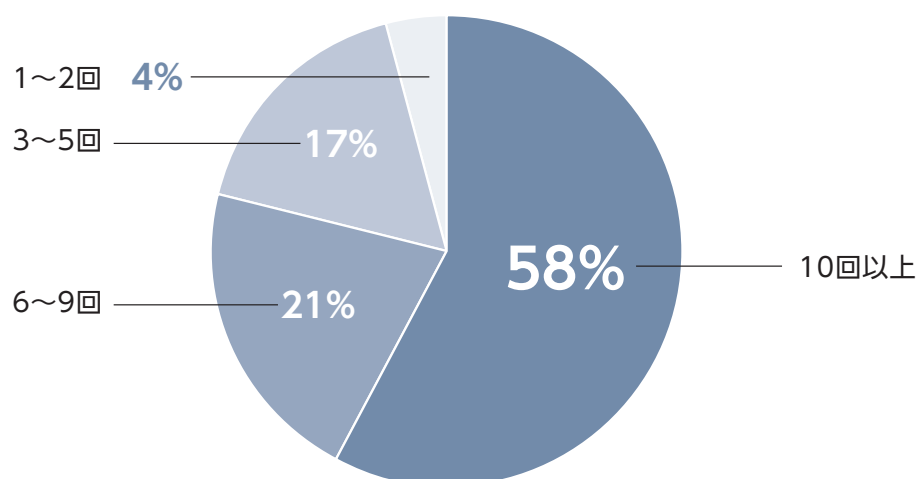
④ 本イベントに参加しようと思った動機は何ですか？（複数回答可）



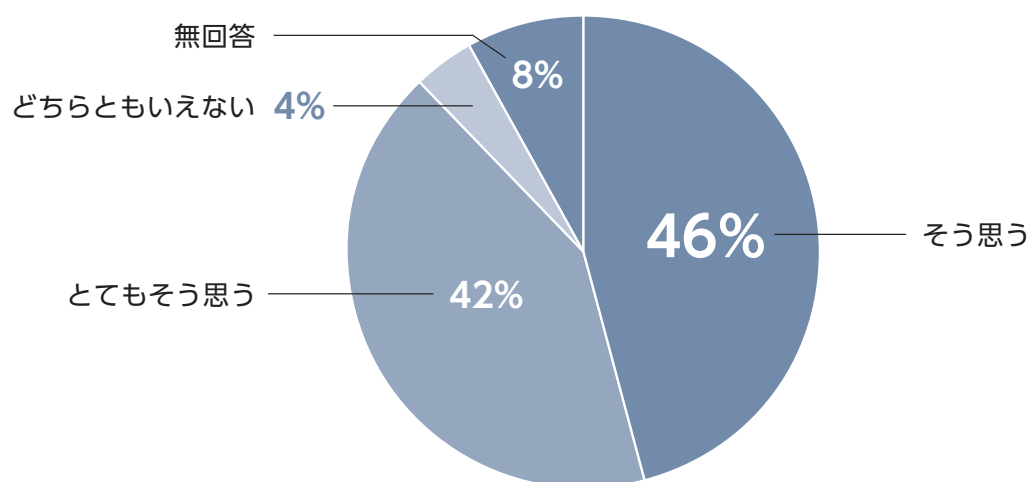
⑤ 本イベントを通じて「六本木アートナイト」に参加してみようと思いましたか？



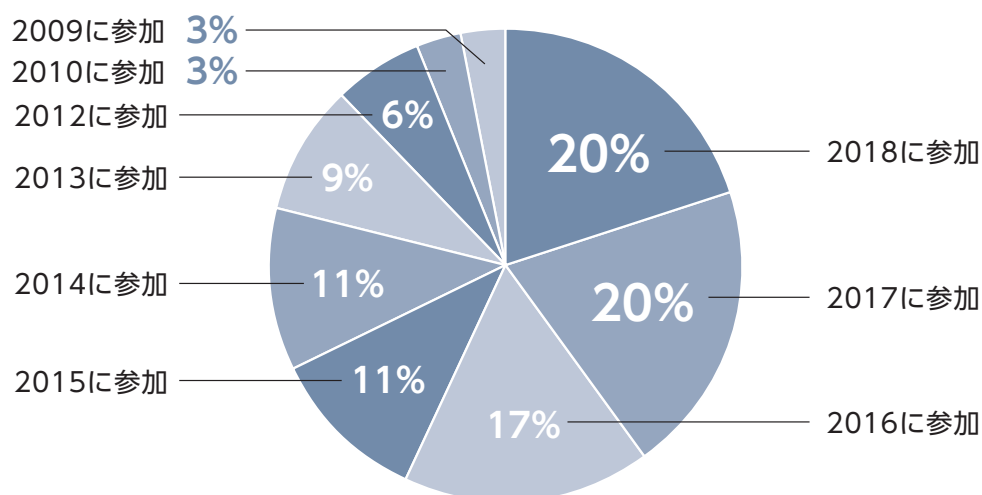
⑥ 1年間で美術を鑑賞する機会はどのくらいありますか？



⑦ 美術に対する関心は高まりましたか？

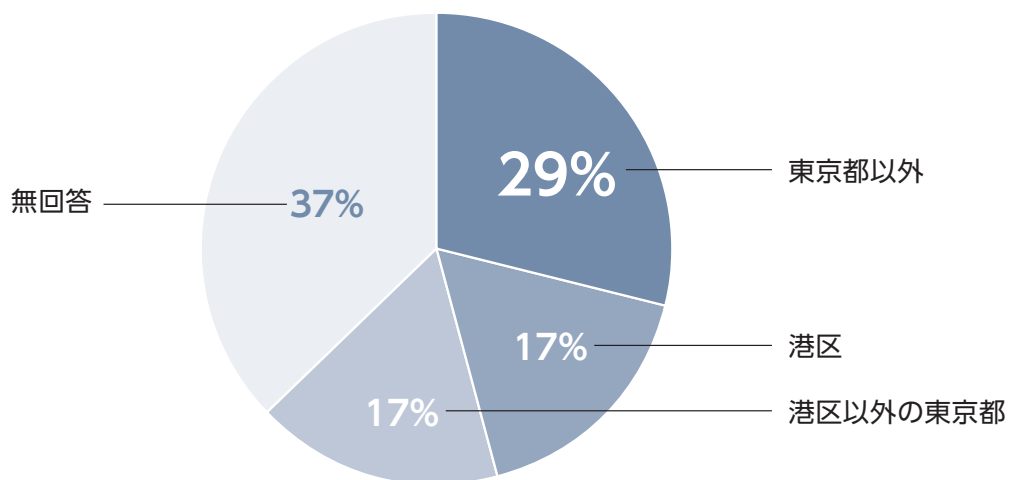


⑧ 過去に「六本木アートナイト」に参加された経験はございますか。(複数回答可)

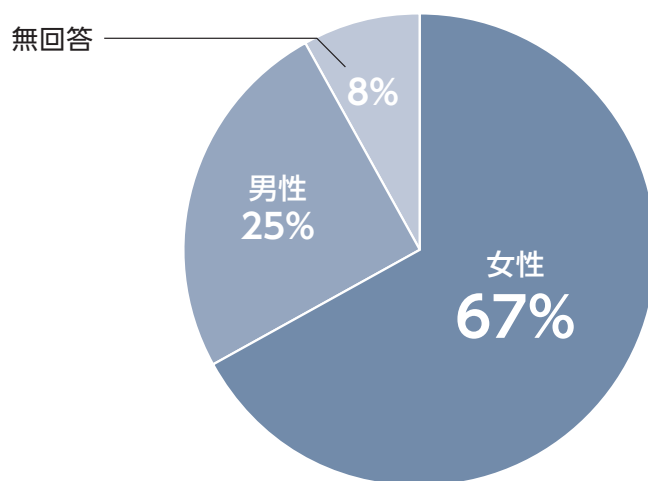


2. あなたのことについてお聞かせください。

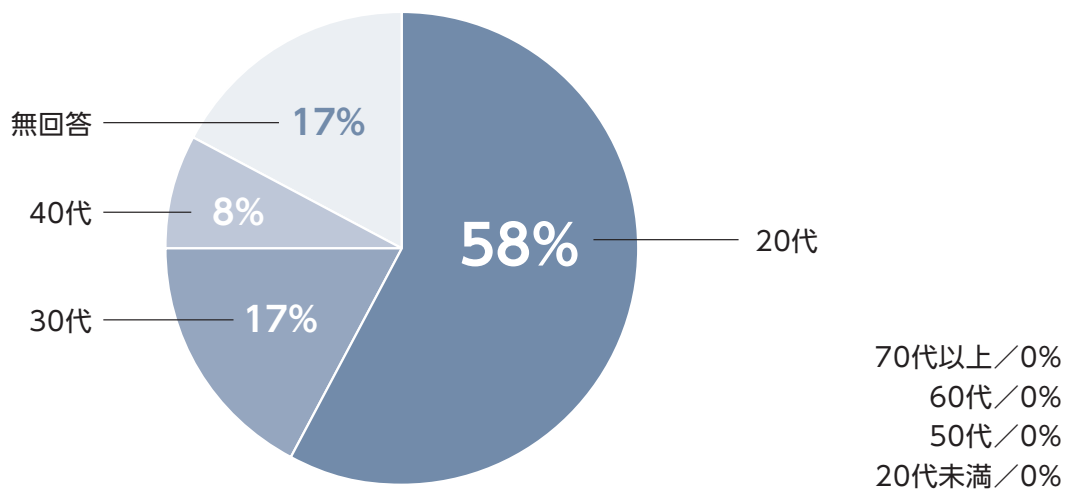
お住まい



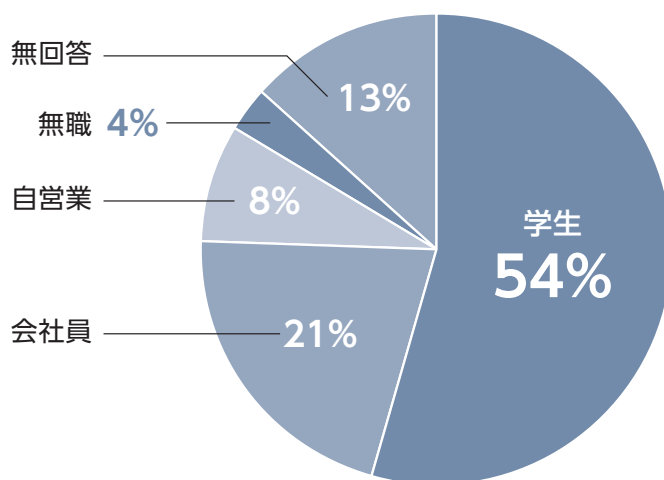
性別



年齢



ご職業



主婦、主夫／0%

3. その他、ご意見・ご感想など、自由にご記入ください。

- ・ 今回の他にも六本木アートナイトの裏方に気軽に話を聞ける会を開いてほしい。
- ・ アートを一般に広めるために六本木アートナイトでアートツアードイベントなどの活動に参加しています。とても参考になりました。慶応義塾大学アート・センターへも何回か伺っています。
- ・ 田村友一郎さんの作品トークとしては面白かったです。アーカイブに関しての話をもう少し増やしてほしい。断片的となるアーカイブをいかに伝わりやすくするかなど、そういう部分が聞きたかった。
- ・ 作家と研究家（鑑賞者）とで視点、着眼点、解釈が異なる部分が見えて興味深かった。人によってものの見方や受け取り方違う＝人の数だけものの見方、受け取り方があるという点でどこまでが「資料」に含まれるのか。何をアーカイブとして残すべきなのか、等々考えさせられた。
- ・ とても面白かったです。もう少し話を聞きたかった。
- ・ 実際に体験することで得られる経験とアーカイブを通じて得られる経験という二つの経験それぞれの良い点を感じた。
- ・ アーカイブと美術評論はどう違うのか。
- ・ 六本木アートナイトは、毎年参加者が増えていると思う。特にバルーン状の人形を使った屋外パフォーマンスは人が多すぎて非常に見づらかった。

〈共同開催〉

慶應義塾大学アート・センター 「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト

現代文化の発信地、国際都市として知られる港区は、同時に、多くの寺社仏閣や史跡、そして歴史ある企業が所在する歴史文化都市でもあります。このダイナミックな時間軸をもつ都市文化の眺望を、一層明らかにするためのプロジェクトが、「都市のカルチュラル・ナラティブ」です。文化を巡る学術的な成果を前景化し、今昔の文化資源を相互につなぎ、文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を結像することによって、現代・将来の芸術文化活動を支え、文化観光の深化を図り、日本の文化に寄せられる国際的な関心に対応することを目指しています。

<http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact>

六本木アートナイト2019

■開催日時：〈メインイベント〉 2019年5月25日(土) 10:00～5月26日(日)18:00

〈コアタイム〉 2019年5月25日(土) 18:00～5月26日(日) 6:00

■開催場所：六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、その他六本木地区の協力施設や公共スペース

■主催：東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、港区、六本木アートナイト実行委員会【国立新美術館、サントリー美術館、東京ミッドタウン、21_21 DESIGN SIGHT、森美術館、森ビル、六本木商店街振興組合(五十音順)】

■助成：令和元年度文化庁国際文化芸術発信拠点形成事業

六本木アートナイト2019×慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト
共同プログラム 『アートナイトを語る—My Night Cruising』 報告書

発行：六本木アートナイト実行委員会

〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー

森ビル株式会社 森美術館内

URL：<https://www.roppongiartnight.com/2019/>